
なごり雪

まめ太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なごり雪

【Zコード】

Z3580Y

【作者名】

まめ太

【あらすじ】

ボーイズラブ小説。洗脳に近い形で隸属し続けた恋が終わり、新たな道を歩き始める少年の再生物語。

「お前は悪夢やつた。」逃げ出しても、悪夢はまだ終わらなかつた。（苦手な人のため、エッチィシーンは極力省いています）

「さよなら……、篤志。

もお、会わへんやうナド。……元氣でな。」

よしやく手に入れた自由の翼を広げて、籠の鳥は逃げ去つてゆく。
縛り付けてきた事や、捕らえ続けていた事を、よしやく噛み締める。

でも、心は戸惑つばかりで、どうしたらいのかも解からない。
「やな……。

なんやかんやで、俺等、ずうつと一緒にやつたのにな。」「

こんな風に別れがやつて来るのは、思いもしなかつた。

彼は、ずっと傍に居るものと、決め付けていたのに。

「千尋に、よみじへづつといつてな。俺の事、気にしどいたら、かな
んから。」

三角関係の果てに、身を引いた……傍から見れば、そう見えたの
かも知れない。薫は、篤志と同棲していたから、普通に見ればそう
思つただろう。

でも、実際は違つた。

新しい興味の対象を得た篤志から、薫はよしやく逃げ出す」とが
出来た、というのが本当。

心理学とか、病理学とか。難しい話で説明するなら、やつこつ事。
篤志はこの日、ずっと捕まえていた小鳥に逃げられた。
ほんの、五分前まで、そつとは気付かずにいたのに……。
ただの、一時的な帰省だと思っていたのは、篤志だけだ。
ほんの、五分前の会話が思い出された。

景色はやうやうしてぼくへぼくへ、季節は真冬。落ちつきやうな曇
天。

「あ、雪や。」

日曜日、午前六時一分。東京駅へ向かう電車のホームで、内藤薫は咳いて、ひらひらと舞い落ちる白いカケラを掌に受け止めた。

その辺のアイドルよりも質の高い整った顔立ちで、薄く開いた唇は、薔薇の花びらのように可憐に見えた。漆黒の髪、とても濃いブルーウンの瞳。

その瞳が、舞い落ちる雪をのんびりと眺めていた。

隣で暇を持て余すように、ポケットに突っ込んだ手を出さうともしない、同年の少年……新塚篤志は寒そうに肩を震わせてくる。鋭い視線の先に、遠く、線路の行く宛てを思い馳せるよう、目を凝らす。

冷たい印象の強いその顔も、かなりの美貌で、さぞ周りが煩いだろうと思わせる。絵に描いたような少年一人の構図。

「春休み終わる前に戻つて来いや。部屋もなんも、そのままやからな。」

仏頂面で自身の要求だけを手短に伝える。

どこか命令口調なのは、篤志の口癖のためだけではなかつた。ずつと……、篤志は薫を意のままに動かし、支配してきた主だ。その関係は数年来続いていて、崩れることのないもののようにも見えた。

「なあ、薫。この前、高岡にもうたチケット……使おてまつで。ええか？」

「うん、ええよ。……どうせ、俺、観に行かれへんし。」

諦めまじりの静かな口調で、薫は答えた。体裁は質問形式に見えて、本当のところは命令だ。篤志は薫に遠慮をした試しなどない。その一枚組みのチケットを、他の誰と使つつもりなのかも、もう知つてしている。

「帰る前には連絡寄せや、ええな？」

強気な言葉で、そう念を押すのにも理由があった。今、篤志は年下の可愛い少年、千尋を口説いている。……鉢合せは拙い、そういう意味だった。

そして。

この時に薫は、口を開き、別れを切り出した。

薫と篤志は高校一年生。親元を離れ、一人でマンションを借りて住んでいる。

篤志の親は金持ちだし、都心の高級マンションを息子に貸し与えるくらいは造作もないらしい。

一人は幼馴染で、高校進学までは大阪に住んでいた。

薫は小さい時から、おとなしくて可愛くて、頭も良かつたので、よく近所の子供たちの標的にされた。それを、篤志がいつも守つてやっていた。

ちいぢりと舞い落ちてきた白い花弁を、なにげなく手のひらで受け止める薫。

大阪ではあんまり見いへんよなあ、と独り言のように呟いた。他には誰も居ない東京駅のプラットホーム。

「ちいぢやい頃から、お前は泣きミソやつたな……。」

「ほんと、篤志に泣かされてたんやで?」

薫はそわそわと電車が到着するのを、待っている。気持ちが揺らいだり、篤志に気付かれたりしない為に、朝、早くに出過ぎた事を後悔した。

早朝のプラットホームには、一人の他に人影はなくて……。

なんだかこのまま、無理矢理引きずつて、連れて帰られるような気がして、怖かった。勇気を奮い起こして、今、ここに立っているのに。

「俺、そんなに泣かした覚えないで。お前の勘違いぢやうん?」

この期に及んでもなお、非を認めない篤志の姿は、なんだか滑稽で、薫は薄い笑みを浮かべる。

篤志は、その表情にどきり、とした。

ちらりちらりと、舞い落ちる雪。天が流す、凍つた涙。

小さい時から、篤志は薫を守るナイトだった。どんな敵からでも守つてやつた。

守つて、というには御幣があるかも知れない。

単純に、他の子供が薫を虐めるのは許せないだけだ。

篤志はよく薫を虐めた。他の子供から守つてやつた後に、拳骨で殴つて泣かせたりもした。

『うえ〜ん……、篤くんが、殴つた〜！〜』

『馬鹿！　お前が弱いから、鍛えたってんのや！』

当時から、薫を泣かせる事が、至上の快楽だった。

薫の泣き顔を見ると、心がとても高揚してイイ気持ちになつた。だから、ほとんど毎日、薫を虐めて、虐めて、虐め抜いた。

他の子供にはいつさい、触らせずに……。

夏が近付けば、思い出す事件がある。

まだ肌寒い六月の中頃。無理矢理、薫を連れ出して、小学校の裏にある森へ肝試しに向かつた事がある。

鬱蒼と繁り、昼もなお暗いその森の奥には、化け物が棲むと噂されている池があつて、肝試しの名目で無理矢理連れ出した薫を、篤志はこの池に突き落としたのだ。

理由といえば些細なもので、当時も、大人達に酷く叱られてもなお、その理由は話さなかつた。薫が泣かないから、という単純な理由だが、その、度を越した執着心には誰も気付かないままに終わつた。

最終的に、薫は大泣きして満足だし、本当は少し反省もした。

当時すでに、薫の相手をしてくれる子供は、篤志しかいなくなっている。ガキ大将の篤志に睨まれる事を恐れて、誰も薫には近寄らない。

独りは寂しい。薫は虚められても、篤志を頼るしかなくなっていた。

『怖いやろ、薰う？ 泣かへんのか？』

『だ、大丈夫やもん……、ダイ、ジョブ、』

真っ青になつても、まだ、涙も浮かべない薫の表情を、篤志はムツとして睨む。

さつきも、わざと大声を出して嚇かしてやつたのに、やはり、薫は泣かなかつた。

『薰う、無理しんとけや。泣けばええやろ、そしたら、帰つたるで？』

『怖、ないもん、……平氣やもん、』

何度、誘いかけても、薫は泣かなかつた。泣かないといつより、恐怖のあまり、そんな余裕などなかつた。

鬱蒼と暗い森。時折り聞こえる無気味な鳴き声。

篤志に腕をしっかりと捕まえられて、薫は震えながら、引っ張られて。

なぜ、こんな所へ来るハメになつたのかも覚えてはいなかつたけれど……、篤志の力強い手の温もりに励まされて、なんとか恐怖に耐えて歩いている。

『ほら、おどろ池に着いたで！ お化けが出るんやと～。

怖いなあ、なあ、薰？』

今度こそは泣き出すだろうと振り返ったのに、やはり薫は泣いてはいなくて。

ムツとしたついでに、池の中へと突き飛ばした。

『や……、がぼ、……助け……ー』

さんざんに池の水を飲み、冷たい水の中で溺れて……引き上げようにも、水の中の薫に手が届かなくて。

やつと、自身のしたコトの重大さを思い知った。

なのに、どうにか助け出した時には、すっかり喉元を過ぎたナントカで、泣きじゃくる薫の姿に満足する。そして、細い身体を抱いて感じた奇妙な思い。

ドキドキと。心臓の音が響いてくるのは、とても気持ちがいい。濡れた服を通して伝わる、薫の肌に初めて欲情した。

俯いたままの薫の横顔……盗み見るよう視線を向けて。最後だというのに、沈黙は重たくも息苦しくもなくて……。失つてしまふのだと言つことを、心が理解してくれない。

「……煙草、買おてくれるわ。」

居た溜めずに逃げ出そうとする。

「あ、俺、持つてるで。」

自然に、薫の鞄から魔法のように出してくる。薫は煙草を吸わないのに。

行つてしまつ……、

受け取つた時の手の白さが、日に焼きついた。

この白い手が、篤志の背中に廻されて……そんな風に、幾千の夜を過ごして来たはずなのに……。

初めて、薫に興味を覚えたあの日から、次第に篤志の行動はエスカレートしていった。

テレビに影響されて、薫を部屋で裸にした。見よが見真似のキス。小学生の時から、こんな具合だつたのだから、一人が一線を越えるのも、早かつた。

中学生になると、篤志と薫の力の差は歴然とし、ますます薫は篤志には逆らえなくなつた。そして、篤志の親が親類の家へ行つて留守になる時を狙つて、篤志は薫を家へと引きずり込んだ。

『今日はうちの親、おらへんねん。……だから、泊つてけや。』

そんな風に話し、断るはずもないと言つように、薫の返事など聞かない。

夕方、まだ日は高く、外では子供たちの遊んでいる声すら聞こえる時刻。

部屋に薫を連れ込んで、篤志はカーテンを閉めた。

『 薫……、服、脱げや。』

高压的な、絡み付くような、低い声。

薰は幼い時からの刷り込みで、篤志には逆らえなくなっている。黙つて、言われるままに、服を脱いだ。

中学生。まだ细く、肉付きも薄い薰の身体を、篤志は舐めるように見つめる。息の荒さから、興奮している様子が薰にも伝わった。薰はと言えば何の感情も起きてはこない。

肌寒いという気持ちと、異様な篤志の視線が怖いと思つただけ。『 そこに……ベッドに寝てみいよ。』

素直に応じる。……嫌だと言えば、良かつたのかも知れない。

けれど、この頃の薰には、篤志に逆らう意思是、もう擦り切れてしまつていて。

何も考える事が出来なくなつていた。

『 女とはちゃうけど……まあ、ええわ。』

まるで、獲物を食する蠍螂のよう、篤志は薰を食つた。

それが毎日になつたのは、高校に進学してからだつた。

薰は地元の高校に行きたいと思っていたのに、篤志の命令では仕方なく、東京の有名高校への願書を出した。

一人揃つて合格。篤志は、顔と頭の両方が良く、その上、スポーツも万能の、出来過ぎた男なのだ。

篤志の親が用意したマンションに、当然のように薰を住まわせる。……この頃から、篤志は薰をペツТЬのように扱いだす。

毎夜のごとくに身体を求めたのは最初のうちだけで、すぐに飽きてしまつ。

薰は従順で、单调で、刺激が足りなかつた。

『 ……なあ、薰。お前、ここ出たら、どつか行く場所あるんか？俺、もしかして、他の奴、連れ込むかもしれないやろ？ そん時のために、どこぞで時間潰せるトコ、探しとけや。』

薰を抱いた後に、平然とそんな事を言つよつになつた。

ここは元々、篤志の親が借りてくれた部屋だ。薫は一銭も支払ってはいない。だから、そう言われば、素直に頷くしかない。

『せやけど、他の奴のトコとかはあかんぞ！　お前の帰る家は、こ

こだけやねんからな！』

他の部屋へ泊りに行けば、きっと、他の奴が薫を食う。それは、絶対に許せなかつた。

『どつか、公共の場所や。……そやな、オールナイトで開いてる口な。』

横暴な要求でも、薫は黙つて頷いていた。

そして、言葉の通りに古びたオールナイトの映画館を見つけ出してくる。

……何日くらい、この映画館で夜を過ごしたかは、もう、覚えてない。

泣ける映画も、そうでない映画も、薫は無反応にここで観続けていた。

ポップコーンを買って、ありあまる時間をぼんやりと過ごす、楽しいような、楽しくないような。

篤志に遠慮して、小さくなつていた背を、ふいに伸ばして欠伸をした。画面では恋人達が抱き合つて、再会を喜んでいた。

『もう、帰つてもええかな……。朝御飯作らなあかんし……、』

呟いて、建物を出る。椅子で寝てしまつて、少し首が痛い。そんな夜も、幾夜。

そして、一年に進級した。

篤志は気紛れに、尻の軽い少年たちを、部屋へと招く。その度に、薫は部屋を追い出された。

『ねえ、彼氏も誘つてあげて構わないよ？　一緒に楽しもうよ。』

『あかん。アイツは誰にも見したらへんねん。俺だけの楽しみやねんから、ちょっとかい掛けなや？』

くすくすと、忍び笑いで。

他の誰かと楽しみながら、頭に薫を思い浮かべた。

『アイツはこない可愛い声は出さんなあ……、

けど、アイツの腰はもつと細いかなあ……。

あちこちで摘まみ食いを繰り返しながら、色々なタイプと薫を見比べて、悦に浸る。誰と比べても見劣りしない薫に満足した。歪んだ愛情だという自覚は篤志本人にも、薫にも、ない。

『薫、新入生に『ごつつ、可愛い子があるんやて！

ちよい、見に行つてくるから、先、帰れや。』

耳打ちして、篤志はその場を立ち去つた。取り残された薫は、黙つて鞄に荷物を詰め込む。

心は、すでに凍り付いていて……。

篤志が言つた言葉の意味も、よくは理解出来ていなかつた。

ロッカールームのある正面玄関で、薫は篤志の姿を見る。大人しそうな、新品の制服を着た一年生と、談笑していた。

華やかな笑顔の、可愛い少年。ふと、薫は考えた。

……あんな風に笑つた事があつただろうか……

とても楽しそうに……心の底からの、嬉しさを表現した笑顔。

心がキリキリと痛む。

何か。とても大切なものを、無くしてしまつた。

悲しみに涙が零れ落ち、それを他人は見つけて、同情してくれる。

『あんまり、見ない方がいいよ……、』

『酷いよね、新塚の奴、』

篤志と薫の仲は、とうの昔に知れ渡つていて……知らしめたのはもちろん、篤志で、そうまでしても、薫が誰かと触れ合う事の邪魔をした。

教室での、堂々としたキス。一隅に追い詰めて、抱き締めて、皆の見ている前で、唇を奪つた。

『コイツは俺のモンや！ 誰も手出しすんなや！』

激しさに、皆、引いてしまい、誰も薫には声を掛けない。高校生

活も、友達が出来ず仕舞いで終わる事を、薫は覚悟した。仕方がない、と諦めてしまった。

篤志の独占欲の強さは異常なほどで、けれど、それはいつもたつた一人に限定された。それがなぜかを考えれば良かつたのに、篤志は問題にもしなかった。

そうして、薫は考えるより、忘れておく努力を払った。

篤志は浮氣性だ。自身が浮氣をするので、薫の事も心配で堪らな
いらしい。

誰も近付けさせないのは、そのせいだった。

他に彼氏が居るくせに、平氣で篤志と寝る少年……そんな子の相手をした夜は、決まって篤志は薫に誓約をさせた。

『俺以外の奴は見るんやない、ええな?』

ついせつとき、帰ってきたばかり……せつきまで、他の子の相手をしていったというのに、そんな時の篤志は酷く貪欲だった。

初めてのあの夜のように、薫の身体を食り食ひつ。

『なんかあつたん?』

あまり言葉を話さなくなつた薫と、それに気付くことやれない篤志の会話。

苛立つていて解かる時には自分から近寄ることやえなくなつた薫に、篤志は何も気付くことがない。

些細な変化がいつしか薫のすべてを変えていたのに、気付くことはなかつた。

とろんと、満足げに、眠たそうな目で問い合わせた薫。

『今日は食わんと帰つて來たんや。……ムカつく奴やつた。』

不機嫌な篤志の声が答える。

まだ名残惜しいのか、薫の胸に唇を這わせて所々に口付けの跡を刻んでゆく。

『ふうん……、』

もう時計は午前一時を廻つていて、薫は眠くて仕方がなかつた。無防備に放つた言葉を、篤志がなんとこうともなく答えた。それだけのこと。

恐れる理由さえない、薫は気付けなかつた。

空回りしてゆく日常に、どちらも気付けなかつた。

雪は少しづつ止み始めている。時々、気紛れに降る勢いを増した。

電車は遅れているのだろうか、まだ到着しない。

小雪がちらつくくらいだ、とても寒くて、篤志は早くマンションに帰りたいと思つていた。

留守電を聞かなくてはならないし……もしかして、千尋からの返事が入つているかも知れないから、心が急いでいた。

まさか、別れを切り出されるなどとは、思つてもいなかつた。

「篤志……、最後に、自分に言わないかん事があるねん。」

急に、薫は口を開いた。

「なんや？ 改まつて。」

「もう、連絡は一切入れへんから。……自分も、俺には連絡して来んといで。」

毅然とした口調。

一切を受け付けない強い眼差しで、薫は篤志を拒絶した。

「な……、」

「これも返す。……もお、要らへん。」

そして、篤志に携帯を押し付けた。

一年の時、いつだつたか、薫に携帯電話を持たせた。

学校ではいつも捕まえておけるはずもなく、ちょくちょく、薫は所在が掴めなくなるため、便利のためにと篤志が持たせた。

いつでも、手許に呼び戻せるように。いつでも、すぐに来させるために、携帯はとても便利な道具となつた。

最初に持たせようと思った時は、確かに、そんな理由ではなかつたよつた気もするのだが……、今が便利なら、まあいいか、とそのままにした。

深く追及すべき事柄を、篤志は「じ」とく無視してゆく。

『もしもーし、薫か？ あのなあ、今、屋上に居るんやけど、すぐ来いや。』

一時間田の授業が終わった後、すぐ薫を呼び出したのは、無性に薫を抱きたくて堪らなくなつたから。

時々、こんな風にわけもなく、薫を確かめたくなつた。

『なんや？ 篤志。

もうすぐ、授業始まるで？』

『ええから、こっち来いや。』

喉に絡む声と、熱を持った瞳を見れば、どうこう用件で呼ばれたのかはすぐに解かる。薫は諦めたように溜息を吐いて、篤志に近付いた。

どうせ、逆らひ事など出来はしないし、逆らおうとも思えない。

ただ、篤志の言つよひに……篤志の言葉に従つていれば、それが正しい道であるよつた気がしていた。

自分で考えるのは面倒だと思つことにして。

こんなにも求められているならいい、と。

真実から逃げた。

『なんで、こんなトコでするんや？』

『スリルがあつてええんや。けど、誰か来たらマズイし、服は着たままええな？』

そつは言つても、結局、薫は全てを脱がされてしまう。確かめるための行為なのだから、隠しては無意味だと迷つたらしない。

遮るように言葉を重ねなければ、薫は切つ掛けを掴めたかも知れない。

『篤志、』

どうせなら、篤志の肌にも触れたいと思つた。

言えば良かつたのだろう、そうすれば何かが変わったのかも知れない。

遮るように言葉を重ねなければ、薫は切つ掛けを掴めたかも知れない。

『あ、これ、昨夜の跡やで？ ほら、

……もつと濃くしといたるわ。』

消え掛けた口付けの跡を見付け、さうに歯でしきり吸い付けて濃くする。

『いやや……篤志、明日からパーク、あるんやで、』

『あかん。お前の肌は誰にも見せたら……見せれんよつじしたるわ。』

『

意地悪く言つた言葉の種類が、変わってしまったのは、いつからだろ？。

薰は変わることが出来ず、篤志の態度が変わってしまったのは。

「薰……お前、」

「俺、やつぱり大阪に帰つて、向いの学校に行く事にしたんや。」

「そんなん、勝手に決めたんか！」

「……篤志。」

「お前、なんか勘違いしてへんか？」

むしろ、怒ったような顔をして、薰は篤志を見つめている。

「勘違い、つて……なにを……？」

そう言われても、何も思い浮かぶ節がなかつた。

「俺、お前の事、好きやつたけど。お前は違おてたやんか。」

お前は俺を捕まえて、縛り付けて……、そんで飽きたから、他の奴に乗り換えたんやろ？

「お前……、俺の事、好きやなんて言つた事ないで。聞いたこと、あらへんもん。俺はただの居候やつたんやろ。前は違おたかも知れんけど、今はそうやる。」

「……勝手に決めて、何が悪いねん？」

薰のこんな話し方を、篤志は初めて聞いた。

いつもは遠慮して、篤志の顔色を窺がつて、それから確かめるように言葉を紡いでいた。こんなに饒舌に話が出来たのだと、新鮮に

感じる。

こんなに真っ直ぐに、自分を見る事などあつただろうか？

ドキドキした。

田の前の薫に惚れ直した。

「けど……つ、お前かて、納得してたやないか……」

なんとか引き戻そと、言葉を継ぎ足した。粘つてみたくなる。別れを切り出された事はすぐに理解出来たのに、どういうわけか、解からない振りをしてみたくなつた。執着するなど、ひとつともなくて嫌だと思うのに。

こんな風に話す薫の言葉を、もっと聞きたい。

はつきりとした意思を感じさせる、強い眼差しで篤志を見つめる薫。

今まで抑えていた感情が爆発し、人形ではない本当の薫が、田の前に立つている。

蝶が羽化する瞬間に、篤志は息を呑む。

「お前、前に言ったやろ？…………恋人とはちやう、つて。」

あんな言葉が引き金になつたとは、信じられなくて、篤志は息を詰ませた。

「あんな…………あんなん、言葉の綾、やろが？

好きでもない奴と一日中一緒に居られるかいや。

よお考えて言えや、薫。」

「篤志…………お前、俺をペツトか奴隸やと思おとつたんやろ？

それとも、便利な家政婦か？ 抱き人形か？…………ふざけとつたらあかんわ。

恋人やない、つて宣言されて……。俺、あれで田え、醒めてんで。

「 薫は篤志を見据えたまま、につ、と笑つた。どこか寂しげで、悲しげな笑顔。

「…………俺は、何をしとるんやろ、…………そお、思つたわ。」

従順に、主に従つ眞田のシモベ…… 薫はちようど、そんな感じで篤志の傍に寄り添っていた。

首輪を付けてもらつた子犬は、とても嬉しそうに尻尾を振る。ちようど、そんな感じ。

何も考えられなくなつていた薫に自我が戻つたのは、篤志の心ない一言からだつた。まさか、篤志自身も、それが二人の蜜月を壊すとは、思つてもいなかつたに違いない。

『あいつは、別に、恋人でもなんでもないんや。』

それは、言つてはいけない一言だった。

『薫……？』

『ヤ……、篤志、『ごめん、

今日は勘弁して……』

昼の事を氣にしているのか、と思ひと、腹が立つた。

なぜ、腹が立つのか。それを、考へるべきだつたのに、考へる事無く、怒りを薫にぶつけた。

『阿呆！ 俺はスタンバイや、もお、止まらへんわ！』

『やめ……！ 嫌や、篤志……！ 止めてやー。』

抵抗するのは口先だけで、それもすぐに喘ぎ声に呑まれてしまつくなせに…… そう思つと、さらに薫を弄る手の動きは乱暴になつた。

『やめてや、篤志、……やめて、』

泣きながらの抵抗が、何を意味するか。

それさえ考へられないほどに、篤志だけが変わつてしまつた。

諦めてしまつた薫は、それから先の日々で、感情を表に出す事を止めてしまった。

それにさえ、篤志は気付かなかつた。

順調にすべてが運んでいく、そう思い、思い上がりついていた。納得は、篤志の中だけの事だつた……。

「お前……つい、数時間前に、俺とやつたんとちやうんか？」
あんな、俺にしがみ付いて、ヒーヒー言うてたやないか……、「

いつもと同じ夜が明けた。

いつもと同じに薫は篤志を受け入れて、朝を迎えて、篤志の為に食事を用意し、部屋を片付け……そして、一人で過ぐした部屋と想い出に、別れを告げて出てきた。

それを篤志は知らなかつた。

「愛してもくれん奴に、いつまでもひつこ居れ、いうんか？
そんなんやつたら、お前なんかわざと忘れて、ちゃんと俺を見てくれる奴、探すわ。」

せやから、別れる、言つてんのやろ、……薫の言葉はいっそ、容赦がない。

何か言わなければならぬ、そつ思いつつも、篤志には言葉が見つからなかつた。巧い台詞で、この状況のなにを変えたかったのか。言葉を搜しているうちに、また、薫が一言告げた。

「俺かて、いつまでも子供やないんやで。……お前の玩具やない。」

薫の決意は固く、搖るぞうにもない。

イライラと篤志は機嫌を悪くして、ついに叫んだ。

「ほな、勝手にせえや！ 俺かて、邪魔者が居りんようになつた方が、都合がええわ！」

余計な一言が加わつてしまい、慌てて口を噤む。

薫を、傷付けてしまつ……今更のよつて、配慮とこつもの意識した。

そんものは、もう、過ぎたのだけれど。

「……他に好きな奴が出来たんやつたら、ええやないか。

今度はソイツ、捕まえて、飼おとつたりええねん。俺は、お払い箱やうから、帰らせてもらひつ。」

薫の言葉が、胸を刺した。

自分を忘れてしまいたいと言つ。

他の誰かを愛したいと言つ。

「千尋を同じように飼えればいい、と言ひ……」

ただ、篤志に捕まつて、飼われていただけだ、と……。便利だと思つていた。

ペットのように思つていた。その心理を、知られていない筈などない。

知つても、じつと、薫は我慢してきたのだ。

氣付かない……解からない。考えられないフリをして。

「俺は、お前と離れたいんや。」

お前なんか、忘れて……人生、やり直すんや。」

睨むような眼差しのまま、薫の目には涙が浮かび、静かに流れ落ちた。

薫が起こした初めての反逆。最初で、最後の。

それは、篤志にとつては予想も付かぬ形で……狼狽えるばかりだつた。

薫の口が言葉を紡ぐ。

「……お前は、悪夢やつた。」

もう、夢から醒めてもええやろ……？」

瞬きもしない薫の目から、いつまでも涙は零れ続けていた。

一年生の気になるあの子……名前は千尋。

杉田千尋。恋に奥手で、ウブな美少年は、たちまち学校中の標的になる。

篤志は千尋を落とそうとして……つっかりと、籠の戸を開け放つた。

『あいつは別に、恋人でも何でもないんや。』

鍵が壊れた。

微かに薫の胸に灯つていた暖かい火を、篤志は自身で吹き消した。今までの年月が、薫にとつては悪夢となつた。

感情を何処かへ置き忘れてきた薫……初めて取り戻したものは、

涙だった。

小雪がちらつく駅のホーム。人はまばらに集まり出した。
俯いて、何を考えているのかも掴めない薰の横顔は、とても綺麗
だった。

胸がキリキリと痛む。

千尋を見て憶えた、甘い疼きよりも……薰を失う切なさに、息が
詰まる。

手を、掴んで取り戻そうとした瞬間に、薰の安堵した声が列車の
到着を教えた。

「……あ、電車……やっと、来たわ。」

逃げてゆく小鳥。鳥籠を振り返りもしない。

本当に、終わったのだと、悟った。

3 (後書き)

とうあえず、序章終了。

……運命が、あるとしたひ。

こんな風に、弱り切つた心の隙間が作り出すのかもしれない……。

工藤浩一は、雑踏の中で見つけたその存在に、強く心を惹かれ……招き寄せられるように、彼の傍へと歩み寄つていった。

「なあ、自分、今……ヒマ?」

急に声を掛けられて、予備校帰りの高校生らしき少年は、驚いた様子で浩一を見た。

なにかおかしな事でも言つただろうか、しげしげと訝しげな表情でこちらを見ているのは何なのだろう?

そんな風に考えながら、なんだか彼の顔には見覚えがあり……唐突に思い出す、同じ学校の生徒だと。

学校どころか、クラスの同級生だ。学校の生徒とは遊ばないために、そうと気付かなかつた。

「なに? 自分、こんなトコで……、」

確かにここは予備校と駅の中間くらいに位置する場所ではあるが、だからと言つて、普通の人があるような場所ではない。ゲイの発展場、と呼ばれる場所で……そんな場所の入口付近でうろうろしていた薰に、不審を覚えた。

「……へえ。自分、そなんや?」
ちよつとイジワルだつたろうか。

顔を赤く染めて逃げるように歩き出した薰の腕を、浩一は捕まえる。

「あ、ウソ、ウソ、『めん! 別にイケズしよお思たんとちやうねん、

氣いつかんと声掛けてたから。なあ、ヒマやつたら、これから晩飯でも食いに行かへん?」

人懐こく……と血つよい、どこか強引に腕を引かれると、断わる事が出来ない。長く篤志に隸属していた薰についた、悪習というべきもので……この時も、薰ははつきりと断わる事が出来ないまま、同級生に引っ張られながら繁華街へと進んでいった。

そうした時には大抵の場合で、嫌だ、と思つのにズルズルと関係まで持つてしまつ。

篤志から離れた後の薰は、まるでタガが外れたようなもので、優柔不斷に附け込むナンパ師の、いいターゲットだった。

傷を広げるだけだと解かつていて、断わり切れない弱い自分がいる。

篤志に似た、強引なタイプの男に言い寄られると、100%、断われない。

「……欲しかつたくせに、」

小馬鹿にしたような声と、小さく響く笑い。

ホテルへ連れ込み、ベッドへ押し倒して服を脱がせ、散々弄られ高みへ追われ、……ようやく、嫌がる素振りを止めた、薰の耳元へ囁きを落とす。

欲しかつたくせに、と……その言葉は薰の心を傷付ける。

どんなに足搔いても、長く刻み込まれてきた、あの存在を消すことがなど出来なかつた。

急に涙を流した薰に、浩一は戸惑い……凍える心を温めるよつこ、薰を抱き締めた。慈しむような腕の動作に、薰も身を預ける。

なにをするでもなく、肌を合わせて互いの心臓の音を聞く。

「……ど、したんや……？ 別に、構へんで？ 僕、正直言つたら、その氣でおつたんやから……、」

やせしきれると悲しくなる。

自身がひどく惨めで、憐れに思つ。

諦め、白状する、……欲求不満が募つて、時折、それと解かる場所へ近寄つて、それでいて、声を掛けられると、怖くなつて逃げだ

す……そんな事を繰り返していた。

心は否定しても、誰かの温もりに縋らなくては先へ進めない自分が居て。

軽い躁鬱症、と診断され、篤志の影響にもがき苦しんでいた。

薫の瞳に、情念の火がちらちらと燃え……愛情に餓えた心を照らしている。

浩一もまた、絶望に近い場所で苦しんでいて。その心に共鳴した。傷を舐めあうようなものだとしても。

必要とする者同士、お似合いなのだと、一夜を共にする理由を作り上げた。

篤志には、ちゃんと自分を見てくれる男を捜す、と……それが別れの捨て台詞だつたけれど、薫が夜を共にする男はみな、誰かに似た男だった。

刹那に流されていると、自身でも解かっている。

一夜限りの関係で終わり、未だに篤志から離れてはいない自身を思い知る。

誰か……誰でもいいから、俺を、ここから連れ出してくれ。

一人になつても、未だに彼の腕の中から抜け出しが出来なくて、もがいている。

いつもの行きずりで終わるはずの関係が、忘れた頃に戻ってきた。

「内藤。話があるんやけど……ちょっとええか?」「え……?」

戸惑いを感じながら、薫は立ち上がる。

教室の、薫の席は一番後ろで、よつやく一日の長い授業カリキュラムが終了したばかりの時だった。

「二人だけで話したいんや。来てくれ。」

浩一とも、一夜限りの関係だと思っていたから、戸惑いを覚える。

促されるままに、つい、後ろに付いてしまって薫は後悔した。

真剣な様子に断りきれなかつたが、用件には薄々、気付いている。大阪へ戻つて三月になるが……仕込まれた身体の成せるワザなんか、フェロモンでも放出しているかのように、薫の周囲には男が群がつてくる。

男子校などに入った自分も悪いのだが、女子の目に晒されるのは絶対に嫌だと思っていたから、共学校など有り得ない話だった。篤志には、喧嘩腰もあつてあんな事を言つたが、薫は、もう男は懲り懲りだと思っていて……もう、恋愛などしたいとも思わない。深く傷付いていて、誰にも、心の中へは踏み込まれたくなかつた。欲求不満なのか、心が不安定なのか、時々、行きずりに身体を慰めてくれる相手と出会えれば、それで充分だと、自分を誤魔化していた。

だが、周りの連中は、そんな薫の意思など無関係に、自身の要求ばかりを薫に押し付けて来る。

強引に口説けば、そのうち折れて、一度くらいは付き合つてくれる……と、そんな噂が流れついて、いつも誰かに言い寄られている。こんな姿を篤志が見たら、きっと、軽蔑するだらう……。

こんな事になつた原因であるにも関わらず、篤志を恨むのは筋違いだと思つていて……悲しいほど、薫は篤志に征服されてしまつていた。

少しづつ壊れてゆく薫を見て、いられなくなつたのは、あの日、本当の薫を見てしまつた浩一だつた。

悩んでいた、自分は薫を愛することなど出来はしない、と、それは解かっていたけれど、黙つて見ている事が、もう辛い。

「薫……俺と、付き合つてくれ、」

「……悪いけど……俺、誰とも付き合つつもり、ないねん。」

いつもと同じく、誰に言われても答える台詞を、面倒そつに並べる。

薫が、誰とでも寝る代わりに、誰とも付き合わない事は、学校で

は有名だ。

薰自身は知らないかも知れないが、みな、都合良く薰を見ている。強引に捩じ込んでも文句を言わない、と……便利に使われていた。それを薰自身も忸怩と受け止めていて。

元カレに知られるくらいなら、死んだ方がマシだと思っていることだろう、と、そう思つから脅迫紛いも有効な手段として利用する。「お前がこの二月ほどでやつてきた事、みんな元カレにバラしてもええよ、」

弾かれたように、薰は顔を上げた。

薰を支配し続ける存在に……浩一は戦いを仕掛けた。

人生の、最後になるかも知れない。

薰をそこから解放してやる事が、贖罪のような気がしていた。

「これから先は、俺が薰のカレ氏やで？　ええやんな？」

「……、」

戸惑いを隠せない薰が、それでも頑なに、返事だけは返さない。「まず、約束や。金輪際、他の男とは寝るな。……病氣でも移されたら、どないすんねん……」

声が沈む、それは自身の過去に言いたい台詞だ。

「それから……俺はエイズやから……セックスは慎重にせなあかんねん。

怖かつたら、なしでもええよ。それで、薰の要求はなんかあるか

？

エイズ……その単語を聞いた薰の、表情が蒼褪める。

一夜を共にしてしまったのだ、無理もない。

「勉強不足やで、薰。エイズつちゅうても、そんな簡単に伝染らんし、死ぬもんでもないんや。

キスでは伝染らんし、セックスでもゴム付けとつたらまあ、心配ないんやで？

ま、無理強いはせえへんから、安心し。」

エイズ保菌者のくせに、自分と付き合いたいという男を……篤志にバラす、と脅しを掛けて脅迫するこの同級生を、薫は憎悪というよりは呆れるような感覚で見ていた。

黙つていれば解からない……素直に告白されても戸惑うだけの事情を、どうして始まりの時に話すのだろう。普通は事後承諾で、後から何とかしようなどと考えるはずなのに。

愛情に到達するのが遅れるだけの、いわばペナルティではないのか。

……そんな恐ろしい病に罹つてなお、恋をしたいものなのだろうか……？

薫はこの同級生、工藤浩一に興味を覚えた。

別に、エイズに罹つて死ぬことを、怖いとは思わなかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3580y/>

なごり雪

2011年11月20日02時12分発行